第2323号（第三種郵便物認可）

20世紀の小説を読むためには——

構造主義的なナラトロジー分析と言語行為論

「行為としての小説」

芳川泰久

本書のもつ性格

それは、書評の締切までの間に、「文藝」の冬季号（十月発売）の「面談文藝時評」で渡部直己が、本書に収められた『黒い雨』論とも言うべき「記述への執念」と「海燕」十月号に載った風丸良彦の「メタフィクションとしての『黒い雨』」との間に、引用のかなりの重複と論旨の酷似を発見し、後者による前者の「パクリ」の可能性を示唆した上で釈明を求める、という事態が生じたからで、成り行きとして、榊敦子と風丸良彦の論考を比べ読むことになったが、そうした作業をすれば、当然、それなりの感想を抱かないわけにはいかない。

風丸良彦の「釈明」というか反論をまだ目にしていない現時点で言えることは、たしかに二つの論考は論旨を共有しているということだ。もっとも、風丸良彦の論考には、井伏鱒二の「内面」を「覆い隠す技術」という論点が一貫して流れているが、その技術を、こんなふうに書かねばならなくなったのには、理由がある。

それは、榊敦子の論旨とほとんど一致しているのだ。そして論旨が同じであれば、引用個所は当然重なる。だから、要は、風丸良彦が榊の論文を読んでいたかどうかという一点にかかっている。すでに読んでいたのであれば、先行論文に対する敬意があまりに足りない。たとえ「内面」を掠奪する技術という視点を出しても、やはり、批評家としての倫理は問われざるを得ないし、その類似を「パクリ」ではないか、と糾弾されても仕方ないだろう。かりに榊の論文を読んでなければ、同じ論旨を、相前後して二人の研究者と批評家が発想したということになる。それだけのことだ。それが、いわば感想とも言えない私の感想で、結局、渡部直己が要求した風丸良彦の「釈明」を待つよりほかない。

もっとも、この問題は、ある意味で本書のもつ性格を示唆してもいる。たしかに、論を説明する際の論旨が、榊敦子の論旨とほとんど一致しているのだ。

『卍』のもつ語りの錯綜とパフォーマンス性の醍醐味をかき消してゆく。そしてその結論が「物語とは一回性のパフォーマンスであり、ひとつとして同じ型はなく、すべての型が共有する筋などありえない。『卍』はそのことを顕在化させ、私たちに教えてくれる、メタクリティックな物語なのだ」というのであれば、たしかにその通りなのだが、あまりに一般化された結語という印象を拭えない。

おそらく、そこへ向けて論旨が形成される結論のこの一般性こそが、他の論旨を呼び寄せるのではないか。そこで語られていることは正しい、しかしもっと言えるのではないか、と。一般性とは、つねにそのような、過剰へと逸脱することのない、不充分な正当性にほかならない。そうした、不充足の部分を各自で埋めるようにと読む者を誘うのが、本書なのだ。かりに私であれば、『黒い雨』の「記述への執念」を示したか、といった点に触れずにはいられない。『黒い雨』の日記をめぐる作中人物の執拗な書き直しは、そのまま井伏鱒二の筆先のそれでもあるのだ。それは、〈語る〉行為の問題というよりは、言語現象として実際になされる発話行為の分析と、小説ジャンルにおける発話行為の分析には、自ずと段差があるはずだが、本書にはその段差への配慮が希薄なのだ。

結論としての金井美恵子論

ところで、この本の読後の印象は、高山宏の文言から受ける印象とまるで違っていた。これもまた、書評をこんなふうに書くことになった理由の一つで、高山宏と違って「近時稀な知的爽快をおぼえ」られなかったのは、ひとえに私の側の問題だが、それにしても「近代文学の古典的名作ばかり」を「四篇」、「明治から昭和にかけての名作について実証」するのが本書の狙いだと高山宏は言うけれど、目次をどう見ても、本論をどう読んでも、対象となっているのは五篇の作品で、そこには「物語論としての物語」と題された本書の「終章」にあたる金井美恵子論（主として『文章教室』を扱う）が欠けている。しかも、十六頁ほどの短さではあるが、集中、これが最も読みやすい。はたしてそれは単なる見落としなのか意図的な削除なのか。そう考えるだけで、難儀で、ただ本書のために言っておかねばならないのは、少なくともこれは「日本近代文学」に対象を絞っているわけではないということだ。むしろ、榊は金井美恵子の仕事に敬意を表していて、「唯一の例外として」と断っているにしても、漱石の『草枕』、鴎外の『雁』、谷崎の『卍』、井伏の『黒い雨』の後に、それらの言及が流れこむべき地点として、金井美恵子の作品を据えていて、そうした著者の意図は尊重されるべきだろう。

もっとも、その結論部に記される次のような発言には、やはり疑義を呈しておかざるを得ない。それは「物語内容が物語言説に先行して存在するという、構造主義の大前提」という発言であり、冒頭にも、それに呼応するように、「ソ

詩

オグリ

この男の腐った

連載も、これで辛うじて最後となった。この一年、与えられた使命はいつもの悪口だ、などと言われることの多かった筆者ではあるが、悪口は悪口なりの型というものがあり、自分のこ

り、そのような期待がすべて裏切られるとき、これまた性別に関わらず、われわれはみな黙るしかない。

女の腐ったような、という表現がある。これに反発したフェミニストに対し

性の階層を無効にする」とかれているが、まず、記号とって二項対立を形成する内容と記号表現であって、うした用語の不正確さも問的な誤謬だが、それ以上にどこから、ソシュールが、して構造主義が、「内容」「記号」に「先立」つと